長崎県外海町「潜伏キリシタン」信仰用具の調査

滝澤修身（長崎純心大学）

はじめに

平成 30 年 6 月 30 日に、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が正式にユネスコの世界遺産に登録された。潜伏キリシタンとは、1614 年の江戸幕府によるキリスト教禁令によって、仏教徒を装いながら、神父不在のもと 250 年の長きに渡って隠れてキリスト教の信仰を守り続けた者たちである。ユネスコでの遺産登録以降、日本の歴史学会では「潜伏キリシタン」研究が興隆し、近年多くの出版物が刊行されている。私は、本件に関し、2012 年から長崎県世界遺産登録推進室より「16 世紀・17 世紀の宣教師記録」の編纂を依頼され、研究員の一員として遺産登録事業に関わってきた。その結果は、『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保護調査報告書』（資料編 1・2）（2013 年）として出版され、今回の世界遺産登録の基本的な史料として利用された。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン」はユネスコの世界遺産登録はされたのではあるが、未だその登録の基礎となった世界遺産登録推進室の研究には、解決されていない大きな研究課題が幾つか存在する。「潜伏キリシタン」の遺産登録は、残存する物的証拠を研究することによって進められてきたが、その中でも潜伏キリシタンたちが使用してきた「信心用具」（宗教画、十字架、メダル、ロザリオ等）の所以や起源が未だ詳しく分析されていないのである。私は、本研究費を申請し、この「信心用具」の分析を行いたい。

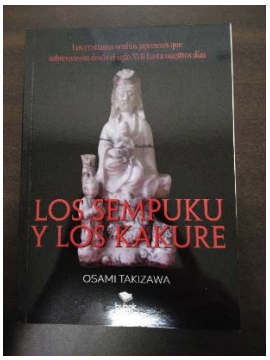
潜伏キリシタンとは一概に言っても、彼らの分布地域は幅広い。長崎県の平戸市、外海町、天草の作津集落など各地に散在している。そこで、調査対象地域を絞り込む必要がある。申請者は、キリシタンの里と呼ばれる「外海」に対象を絞りたい。「外海」は、遠藤周作氏の小説と映画『沈黙』の舞台になった村であり、長崎市内から離れた山里であったため、幕府のキリシタン穿鑿が入りにくく、多くの「潜伏キリシタン」が存続し、未だ彼らの末裔も多く現存している。この外海町には、長崎市外海歴史民俗資料館があり、数多くの潜伏キリシタン関係の信心具が収集されている。

まず、長崎市外海歴史民俗資料館に保存される外海の潜伏キリシタンたちの信心を実際に調査する。彼らの「信心用具」は、長い潜伏の期間に、元来の「信心用具」とは形が異なるものが形作られていった。どのような歴史的・社会的背景、どのような宗教的由来や伝統の中で潜伏キリシタン特有の「信心用具」が形作られていったのかを史料館に保存される物証から分析してゆく。

第1章　JFE21 世紀財団の研究助成金で行った研究の成果

2022 年 12 月から 2025 年 1 月までに本助成金で行った研究成果を記す。

① 2023 年 5 月 19 日にマドリードの Bubok 出版社から外海の潜伏キリシタンと隠れキリシタンについてスペイン語著作 Los Sempuku y los Kakure. Los cristianos ocultados japonses que sobrevivieron desde el siglo XVII hasta nuestros días. を出版した。
② 上記の著作の英語版を作成した。将来的に出版する予定である。
③ 外海町民俗資料館に保存される潜伏キリシタンの信心具と彼らの書物を実地調査し、目録を作成した。各信心具に関する解説も行った。既存の研究では、初めての試みであった。
④ 外海町黒崎地区の潜伏キリシタンの末裔である松川隆治氏と迫地区の隠れキリシタンの末裔である村上茂則氏から 2022 年 12 月から現在（2025 年 1 月）まで聞き取り調査を行っている。本聞き取り調査を行った結果、外海の潜伏および隠れキリシタンの信仰の実態が明らかになった。
⑤ 2022 年 12 月から現在（2025 年 1 月）まで、松川隆治氏と村上茂則氏の案内のもと、外海町の潜伏キリシタン関係の遺産（墓地、キリシタン寺、キリシタン神社等）の調査を行っている。
⑥ 東アジア研究国際学会において「外海の潜伏キリシタン」というタイトルで 2023 年 9 月 23 日（土）と 2024 年 9 月 21 日（土）に本研究の成果を発表した。
⑦ 2023 年 1 月から 2024 年 11 月まで、長崎市浦上キリシタン資料館で、「日本キリシタン講座」という講座を自ら開講し、月の第二・第三土曜日の 14 時から 15 時の間に本研究の研究成果を長崎市民に講義した。これは私の研究成果を社会的に還元する目的で行った。



スペイン語の著作 Los Sempuku y los Kakure

本報告書においては、外海民俗資料館の信心具の説明と目録の一部、そして、松川隆治氏に

対して行った聞き取り調査の一部を紹介したい。その他の調査結果に関しては、将来的に著書や論文にまとめ上げていく予定である。

第２章　外海町民俗資料館　信心具の説明

潜伏キリシタン信仰の中で信者が大切に崇敬してきた信心具を「タカラモノ」と言う。信者の内数軒が、これらの信心具を竹筒の中などに保管し、開けてはならないとし、人目に触れないようにしてきた。キリシタン弾圧が厳しかった時代には、タカラモノを納めた竹筒は茅葺屋根の中に差し込んで隠していたという伝承がある。出津のある家族のタカラモノは、下ろし梯子で登る天井裏に置かれていた。もし、敵や偵察者に見つかった時に、彼らの目を潰すためにコショウバイ（胡椒と灰を混ぜたもの）を入れた袋も置かれていたようである。ジイサンや帳方の家で宗教行事が行われる時には、信者がタカラモノを持って集まり、共同でそれらを祀り、初穂（供物）を捧げてオラショを唱えた[1]。

タカラモノには、十字架が付いたロザリオ（数珠）やメダイ、金属製の像などがある。かつて外海で発見された「雪のサンタマリア」「無原罪の聖母」や野中騒動の引き金となった「ロザリオの十五玄義」「聖ミカエル」のような聖画も存在する。そうした聖画は「ゴエイ」「ゴイエ」（御影）と呼ばれた[2]。

第１節　外海町民俗資料館に保存される潜伏キリシタンの信心具の説明

（１）　聖人像類

外海町民俗資料館には、上記のタカラモノが保管されているが、まず、像群から、説明しなければならない。同資料館には、キリスト教関係の像と仏教関係の像が保管されている。前者では、キリスト教、無原罪の聖母像、聖ヨセフ像、聖フランシスコ・ザビエル像、イグナティウス・ロヨラ（イナッショ様）がある。一つの聖母子像後者は、板踏み絵にはめ込まれている。後者には、マリア観音像、十字漢音像、八面観音、誕生仏があげられる。

（２）マリア観音

外海地方では、潜伏時代を通じ、聖母マリアが深く信仰されていたことが、幾人かの研究者によって指摘されている。外海の潜伏キリシタンたちは、聖母マリアのイメージを求めて、観音像を拝み始めたが、これらの観音像は「マリア観音」と称される。このマリア観音は、

---

[1] 中園成生『かくれキリシタンの起源』、弦書房、2018 年、140 ページ参照。

[2] 前掲書、140 ページ参照。

中国伝来の純然たる仏像であった[3]。

マリア観音は、第一に禁教下で表面的に仏教を装い、信仰を隠匿していたキリシタンたちが、観音像を祀ることで仏教徒であるように見せかけながら、心の底では聖マリアとして崇敬していたもの、第二に、本当の聖母子が入手できなかったために、観音像を代用する、という心理から崇拝されてきたものである。潜伏キリシタンたちは、慈母観音に限らず、神・仏像、銅鏡、古銭などのキリストや聖マリア、聖人たちのイメージを求められるものであったら何でも良かったのであろう[4]。

（3） 十字架

外海民俗資料館には、潜伏キリシタンたちが信仰の対象としても用いた多くの十字架が保存されている。中には、古銭、コンタツが付けられた十字架もある。まず、十字架について説明をしたい。

十字架とは、十字に組み合わせた木を用いた処刑の道具である。イエス・キリストは十字架に張り付けられ処刑されたことから、キリスト教の象徴になる。十字架に罪人の体を縛り付け、ときには両手を釘で打ちつける処刑方法は、フェニキアをはじめ古代諸国で行われていた。ローマ時代には、奴隷や凶悪犯に用いられた。ユダヤ地方を統治していたローマ総督ピラトにより、イエスは強盗犯人２人とともに十字架で処刑された。この処刑は、イエスが卑しい人間の扱いを受け、極刑に処せられたことを表す。『新約聖書』のイエスの伝記である福音書では、十字架という言葉が、早くも重荷や苦難などを意味するものとして用いられている[5]。あるいは、恥多き死や屈辱に対する忍耐[6]を表すこともある。『新約聖書』の「パウロの書簡」になると「わたしの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた」[7]のように、古きものの死、罪からの解放を表すものになっている。俗世的なるものや肉の情欲にとらわれていた自己に、死んで新しい生の世界が与えられたことの印とされる。「エペソ書」や「コロサイ書」では、イエスの十字架の死が、神との和解であるという贖罪思想がみられる[8]。

十字架をキリスト教の象徴としたことは、迫害下に地下の墓地（カタコンベ）に設けられ

---

[3] 片岡千鶴子「浦上村キリシタンの潜伏と信仰伝承～「信徒発見」を可能にしたもの～」、『キリシタンの潜伏と信仰伝承』、長崎純心大学、2011、56―58 ページ。

[4] 片岡弥吉『長崎のキリシタン　信仰の証と継承』、智書房、2023 年、58 ページ。

[5] 日本聖書協会『新約聖書』「マタイ伝福音書」、日本聖書協会、10 章 38、16 章 24、2015 年

[6] 前掲書、「ヘブル書」12 章 2

[7] 前掲書、「ロマ書」6 章 6

[8] 前掲書、「エペソ書」2 章 16、「コロサイ書」1 章 20

た教会の壁などに、その形が描かれていることで理解できる。コンスタンティヌス帝が、空に十字架の印と「この印で勝て」と書かれた文字を見て、十字架を軍旗としたという話は有名である。

十字架は、やがてキリスト教の象徴であるだけにとどまらず、礼拝の対象となっていった。初めは十字架だけが祭壇に置かれたが、後、キリストの磔像を伴うようになった。そのキリスト像には王冠をつけ、罪・死に対する勝利者としてのキリストから、人類の救済のため、贖罪の苦難のキリストへ、という変遷も見られる。

復活祭前の金曜日は、キリストが十字架に付けられた受難日、受苦日とされ、ローマ・カトリック教会では十字架に接吻する儀式が執り行われる。指で十字架の印をつくる儀礼は、「父と子と聖霊の御名によりて」を唱え、ローマ・カトリックでは額、胸、左肩、右肩の順、東方教会では額、胸、右肩、左肩の順でなされる。十字架の印を切ることは、神の恩寵にあずかる秘蹟（サクラメント）に準ずるものとされている。また、時には、十字架が悪魔払いに用いられることもある。なお、プロテスタントでは、この十字架のしるしを作らないし、十字架像を崇拝の対象とすることもしていない[9]。

（4） コンタツ

コンタツとは、ロザリオの祈りを唱えるための数珠のことである。コンタツという単語の起源は、ポルトガル語である。この数珠そのものを、ロザリオとも呼ぶ。10 個の小珠（アヴェ・マリア）と 1 個の大珠（主の祈り）が組（一連）をなしている。黙想する秘義をはじめに唱えて心にとめ、小珠を繰りながらアヴェ・マリアを 1 回ずつ唱え、終わりに栄唱を唱え、大珠で主の祈りを唱えるのが基本的な祈り方である。

少々ロザリオの祈りについて言及しておきたい。ロザリオとは、カトリック教会において広く親しまれる祈りの形態である。伝統的な形式では、救世主イエス・キリストとその母マリアの主な喜び、苦しみ、栄えの秘義の黙想を行いながら、アヴェ・マリアの祈りを繰り返し唱える。マリアと共にイエス・キリストによる救いの秘義を思い巡らし、父である神に賛美と感謝を捧げるところに意義を有する。

15 世紀より 20 世紀の末まで長く伝統となった基本的形態式として、喜び（第 1 環・受肉）、苦しみ（第 2 環・受難）、栄え（第 3 環・復活、昇天、精霊降臨）の 3 つの秘義それぞれについて 5 つ黙想を行う。

第 1 環の喜びの秘義では、(1) 受胎告知、(2) マリアのエリザベト訪問、(3) 降誕、(4) 神殿奉献、(5) 神殿にいる少年イエスの秘義が対象である。第 2 環の苦しみの秘義では (6) ゲツセナニの祈り、(7) むち打ち、(8) 茨の冠、(9) 十字架を担うキリスト、(10) 十字架上での死である。第 3 環の栄えの秘義では、(11) 復活、(12) 昇天、(13) 精霊降臨、(14)

---

[9] 鈴木範久、『日本大百科全書』、十字架の項。

マリアの被昇天、(15) 聖母戴冠である。これが伝統的な「ロザリオの 15 秘義」である。教皇ヨハンネス・パウルス 2 世は、これにイエスの公生活の 5 つの秘義を「光の秘義」と呼び、新しい環として加えた[10]。

（5）メダイ

一般的に金銀銅または真鍮や鉛でできた円形もしくは卵形の平板に文字やシンボル、事象、神々、人物などを彫り描いたものである。記念行事や勲功や勝利などで人の顕彰に使用される。キリスト教では、固有の様々なシンボル、キリストや聖人の生涯、教会生活における洗礼・叙階・請願などの記念や巡礼の記念として使用される。「メダイユ」とも呼ばれる。

キリスト教的なメダイは元来、古代の諸宗教やグノーシス主義の教団において魔術的に使用されたものと関係があると考えられる。これにキリスト教的な意味を込める文字や図像が刻まれた。次第にキリスト教的特徴をもつメダイが生まれた。4 世紀のヴェローナのゼノは、キリスト者のメダイ携帯を異教文化の聖化の例としてあげる。特に新しい受洗者にその記念としてメダイを贈呈する慣習があったことを伝えている。 8 世紀にかけて盛んに作られ使用されたが、その後メダルの慣習は衰退した。１２世紀以降、巡礼熱の高まりとともに新たに巡礼記念メダイの製造が盛んになる。１３世紀には所有者のイニシャルや紋章が彫られた小型のメダルが作られ、主に身分証として、時には硬貨として使用された。

トリエント公会議の後には免償の付与と関連付けたメダイでの祝福が行われた。1566 年、教皇ピウス 5 世はイエスとマリアの像のメダイを、1587 年シクトゥス 5 世は前年ラテラノ大聖堂で発見されたローマ、ビザンティン時代の硬金貨を祝福した。バロック時代においても巡礼記念や、ペストの流行やトルコ戦争などの困窮時に、免償の保証としてメダイに対する信心が盛んになった。数多くの信心会の記章としても定着していった。日本のキリシタン遺跡においても、踏絵、ロザリオ、十字架、祈祷書と並んで多数のメダイが発見されている[11]。

（6）バスチャンの椿

バスチャンの椿の起源は、樫山の赤岳の麓にあった椿の大木の幹に日本人伝道師バスチャンが指先で十字架を記すと、鮮やかに十字架が残ったので、この椿を霊樹として尊んだことに遡る。その後、赤岳も神山と見なされ、この椿には斧が入れられることはなかった。けれども、1856 年（安政 3 年）の茂重騒動の時、役人が椿の木を切り倒すと聞いたキリシタ

---

[10] 上智学院『新カトリック大辞典』(第 4 巻)、新カトリック大辞典編纂委員会、2002 年、1448-1449 ページ。

[11] 前掲書（第 3 巻)、961 ページ。

ン達が、夜中に自分達の手で切り倒して、椿の木の小片を家々に分配した。以後、キリシタン達は椿の木を崇拝するようになった。死者が出ると、額に椿の小片を白い布で巻いて「おみやげ」として持たせる習慣も残った。

バスチャンとは、外海地方で活躍していた日本人伝道師であった。その名は、ローマの殉教者聖セバスチャンに因んで付けられた。深堀村平山郷の布巻に生まれ、菩提寺の門番を務めていたとう言い伝えがある。いつの頃からか、高鉾島の沖合で焼き討ちされたカピタン・ジワンの弟子になって一緒にキリスト教の伝道に励んだ。バスチャンは、幾つかの信仰物を残した。(1) バスチャンの日繰り（暦)、(2) バスチャンの十字架、(3) バスチャンの椿、(4) バスチャンの 4 つの予言である。これらは、長崎地区の潜伏キリシタンの信仰を支えるのに、大きな役割を果たした[12]。

（7） 宗教資料

長崎市外海歴史民俗資料館に保管されている宗教資料は、オラショ、天地始まりの事、公共要理、切死丹宗旨御改帳、キリスト教教義の説明書、掟と信者の心得等である。特に潜伏キリシタン達が唱えたオラショが多く保管されている。オラショは、口移しでの伝習は困難である。また忘却、転訛を免がれがたい。そのため、何時ごろからか、オラショの筆者本が作成された。和紙大幅形が普通であるが、半紙綴じのものもある。また紙一枚のものも存在する。個々のオラショの写本と、多くのオラショを編集したものに分類できる[13]。

オラショとは、祈りを意味するポルトガル語であり、ウラッショ、オラッシャなどと訛ることが多い。日本の神や仏とは異なった概念であるデウスへの祝詞や教文とは異なった祈りとして、日本語に訳さず、オラショと呼びならし明治時代に至った[14]。宣教師がいなかった 2 世紀半、オラショは口から耳に伝承し続けてきた。そのため、転訛がみられる。伝承した当時の条件の悪さから察すれば当然の結果であろう。むしろ、これらのオラショが伝承されてきたことが驚嘆すべきことである[15]。

（8） 日繰り

潜伏時代の 1 年間の信仰生活は、外海の潜伏キリシタンは「バスチャンの日繰り」と呼んだ教会暦によって行われた。この暦は、日本人伝道師バスチャンが、その師ジワンから伝授されたものと言われる。この暦によって日曜日や祝祭日を繰り出して決めていたのである。

---

[12] 片岡千鶴子、前掲書、59―60 ページ。

[13] 片岡弥吉『踏絵　かくれキリシタン』、智書房、2014 年、211 ページ。

[14] 前掲書、342 ページ。

[15] 前掲書、343 ページ。

一人の神父もいなくなった潜伏時代、ミサや司祭の説教もなくなってしまった。潜伏キリシタン達は、「バスチャンの日繰り」によって祝祭日を守って、各々のオラショを唱え、村の長老が村人に、親が子に教理を伝え信仰を守り抜いてきたのである[16]。

調査の結果

調査の結果、長崎市外海歴史民俗資料館に保存されているすべての外海地域の潜伏キリシタンの信仰用具類は、マリア観音を始めとするキリシタン関係の像類、十字架、コンタツ、メダイ、バスチャンの椿、宗教資料、日繰りに大別できることが理解できた。製造されたのが 16 世紀に遡る信仰用具もあれば、大浦天主堂おける信徒発見後（1856 年）にパリ外国宣教会の宣教師によって外海にもたらされたものもある。本稿では、同資料館に保管されているすべての潜伏キリシタン関係の信仰用具をリストアップしてみた。今後、このリストが外海の潜伏キリシタン研究に活用されることを期待してやまない。

第 3 章　旧外海町黒崎地区の潜伏キリシタン・隠れキリシタン聞き取り調査

1614 年、江戸幕府は禁教令を発布し、日本人がキリスト教を信仰することを禁じた。1644 年、最後の神父小西マンショが亡くなると、日本には神父が不在となる。しかしながら、仏教徒を装いつつキリスト教の信仰を貫く者たちがいた。彼らを「潜伏キリシタン」という。彼らは、1873 年明治政府がキリスト教を認めるまで、長崎周辺で信仰を貫いた。1873 年にキリスト教禁令が解かれると、カトリック教徒に復帰する潜伏キリシタンが多く現れたが、250 年間守り抜いてきた日本社会に土着化した信仰を守り抜く者たちもいた。彼らが「隠れキリシタン」である。

今回、聞き取り研究を行った外海潜伏キリシタン文化資料館館長の松川隆治氏は、隠れキリシタンの末裔である。

---

[16] 片岡千鶴子、前掲書、61―62 ページ。

松川隆治

外海潜伏キリシタン文化資料館

（松川） 信心用具はこの地域は結構残っていますね。樫山地区も含めて外海をみたら、収集している信心用具は多くなってきていますね。都会に住んでいる家族が、家屋を解体するときに、信仰するわけにもいかないし、捨てるわけにもいかないということで、展示させていただているのですよね。基本的に、家に祀っているものは、家の「お宝もの」として、そのまま祀っておいてくれと頼んでいます。ですので、神棚なんかにキリスト教の信心用具が祀られていることがあります。

（滝澤） この箱は何でしょうか？

箱

（松川） 私も詳しいことまでは分かりません。結構、古くはあるんでしょうけれどね。外目潜伏キリシタン文化資料館に保管されていた箱も同じような形です。マリア観音像 2 体がこの箱に入っていたんですよ。50 年ぐらい前に、長崎新聞の記者が取材して記事にしています。さらに正木慶文さんが『長崎のカクレキリシタン』の中でそのマリア観音について書かれています。それ以来、箱の中に入ったままです。このマリア観音も気づくのが一日遅かったら、解体業者に壊されていたでしょう。

イエズス会の聖骨箱

（松川） このイエズス会の聖骨箱は古いですよ。出た時に、日本二十六聖人記念館の結城神父のところに持っていきました。結城神父は、開口一番「中に何か入っていなかったか」と言われました。聖人とか殉教者の遺物を入れておく箱ということでした。この箱には、イエズス会のマークが付いています。イエズス会の宣教師が 16 世紀に直接伝えたものですね。これは希少なものだそうです。宣教師か地域の有力者しかもたないものだそうです。17 世

紀になるとこの地域には、托鉢修道会が入ってきます。フランシスコ会が入って来てると思うんですよね。外海に残されていた『十五玄義図』にフランシスコ会関係の影響が見られます。禁教令が出た後は、イエズス会の影響は見られなくなると思います。その代わりに托鉢修道会が外海に入ってくるのですね。

１６世紀の聖遺骨箱（HIS の紋章入り）

箱の中

（滝澤） メダイというのは何でしょうか？

（松川） このメダルのことです。このメダイは、まだ初期のものかが確定していません。再布教よりは古いでしょうか。

メダイ（1）

メダイ（2）

（滝澤） 先生もこういった信心具は拝まれていたのですか？

（松川） 私が２歳ぐらいの時父親が戦争に行って亡くなりましたので、家の宗教に関しては一切分かりませんでした。隠れキリシタンということだけは分かっていました。祖父が小学校 2 年の時に亡くなりましたが、祖父も家の宗教の事は一切話しませんでした。母はよそから嫁いできているのもですから、家で信仰具が見つかった時には全然知らなかったと言っていました。家を作り変えようかという時に、私が日曜日に帰って座敷に座っていると、仏さんの置いてある上の戸棚から竹筒が出てきたんですよね。中を開けてみたら、この二つが入っていました。１６世紀のメダイと聖遺骨箱です。

竹筒

（滝澤） 竹筒の中からこちらの聖遺骨箱が出てきたのですね？

（松川） そうです。さきほど述べましたが、結城神父の所に持っていくと、貴重なものだと言われました。

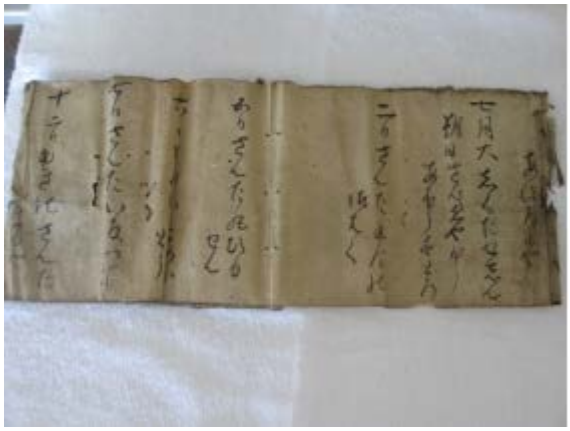
定年退職後、傍爾石（これより佐賀藩、これより大村藩と書かれている）を見つけて藩境を調べようと山の中を歩いていたのですが・・・90 歳ぐらいの年輩の方は、「この石はあなたの家にもありましたよ」と言ったんですよね。私達は子供のころこの石の上にのって遊んでいました。（この石は、祖父が黒崎漁港の係留用に持っていき使用していましたが、嵐の時に二つに折れて放置されていました。その後、民俗資料館に持っていかれ持参資料として展示されました。）私の家は庄屋だったそうで、この石があったそうです。確かに、私の家の造りは違っていたなと思い出しました。

傍爾石

家が庄屋だったということで、祖父がカクレキリシタンの役職についていました。枯松神社を作るときも、祖父名義で土地を寄贈しているんです。現在の神社の前にあった神社は、昭和 13 年にカクレキリシタンの人に呼び掛けて、寄付の協力を求めたんですね。500 件ぐらいのキリシタンの家庭が、苦しい中でも基金を出し合って、枯松神社を作ったんですよ。その寄贈者の名簿の中に祖父の名前があった。その名簿を見ていると、どこに隠れキリシタンが多かったのか分るんですよね。一番多く寄付金を出しているのは大野地区です。ほぼ 100 パーセント、カクレキリシタンでした。120 軒全部です。続いて樫山ですよね。東も西も樫山って書いてあるんですけどね。遺産登録事業では、「大野集落にカクレキリシタンが多く存在し、彼らを「門神社」（カクレ神社）と結びつけていますが、本当は枯松神社に来ていたんですね。」終戦後まで大野の人は、枯松神社に通っていました。牧野、樫山の人たちもそうですね。枯松神社は、サン・ジュアン神父を祀っていて、カクレキリシタンの聖地だったのです。

（松川）こちらの箱は、向こうの箱とは違うのですか？これは、この資料館の一つ上の人が持っていた箱です。(白磁のマリア観音が保管されていた箱とは違うのですけれど)。この仏像と同じ出口さんという人が所有していたものです。それとオラショ。このオラショも出口さんのところのものです。これは畝刈の垣内の最後の帳方松崎源右衛門さんが使っていた日繰り張です。こちらのオラショは、山口さんのところのですね。

箱に入っていたマリア観音



松谷源右衛門氏の日繰帳

（滝澤） これらの信心具はどのように使用されていたんでしょうか？

（松川） 箱に入れて祀っていたんですよね。集会や儀式があるときに、帳方の所に持って行って、みんなで礼拝する。台にのせて礼拝すんですよ。それを「人形頂き」という言葉で呼んでいます。

（松川） それぞれの家庭に信心具があり「お宝もの」と言って、竹筒の中にいれて保存してあるんですよね。この像は、よく「イナッショ様」とか呼ばれています。「イナッショ」という呼び名は、イエズス会創始者のイグナチ・デ・ロヨラに因んだものでしょうね。この地域で、16 世紀に、キリスト教宣教をしていたイエズス会の影響ですね。

イナッショ様

（滝澤） これは銅製なのですよね。日本で作られたものですかね？

（松川） 輸入品ではないかと思うのですが。

（滝澤） こちらの十字架の付いたロザリオの方から説明をお願いします。

ロザリオ

（松川） これはパリ宣教会のもので、信徒発見後、この地域に神父さんがいるという情報が入って来て、この地区の人たちが大浦天主堂に押しかけていった。こうした情報は浦上の方から入ってきたのですね。4 月 5 月には情報が入ってきて、天主堂の方に行ってます。プチジャンの報告書（純心大学図書館）の中にありますね。そして、いろいろ信心道具を貰ってきているんです。その一連のものだろうと思います。ほどんどの外海の家庭に保存されているんですよね。教会に復帰しなかった人たちは、この神父さんからもらったものも祈りの対象にした。竹筒に入れて、大切に保存してるんです。帳方のところで何か集会があると、帳方の家に持って行って、台の上に載せて礼拝するんですよね。先ほども言いましたが、それを「人形頂き」と呼んでいるんですよね。ロザリオとか十字架は神父さんもらったキリスト教的な物だったのですね。まだキリスト教を信仰している家庭では、まだ竹筒に入れて、保存しています。この資料館に保存されているものは、「家庭で継続できないからと言って置いていかれたものです。」「家庭にあってこそ「宝物」だから、できるだけ家庭に於いて保存して欲しい」と言っているのですが。

樫山と浦上は一番つながりが強いかな。白磁のマリア観音は出津にはほとんど保存されて

いない。黒崎に一個ですかね。浦上には白磁が多いですね。樫山が結構数は多いですが、浦上との関係ですかね。後、垣内が一つかな。垣内のマリア観音は、少し小さいんですが。まだ「先祖から引き継いだものだから、他人に見せてはいかんと言って、見せてくれない家庭もあります。」黒崎の所有者は、写真も撮らせてくれないですよね。

（滝澤） これも古いものですか？

（松川） これも 17 世紀ぐらいの禁教時代のものでしょうね。

江戸時代のマリア観音

（滝澤） こちらの小さいものはなんでしょうか？

マリア観音の一部か？

（松川） マリア観音ですね。最初は右側の折れた部分かなと思っていたのですが、違うんですよね。これは樫山地区からのものです。これは昭和 50 年代に、長崎新聞と正木慶文（お寺の息子さん）が樫山を取材した時に調査しています。以前では見せてくれませんでしたが、代替わりして若い人たちは頼んだら見せてくれるのではないかと地域の有力者の仲介で見せてもらっているんですよ。それ以降、調査は行われていません。家の本人たちも忘れてしまっている。このマリア観音は、家を解体するときに、納戸から見つかりました。あとオラショを書き写したものがあります。このマリア観音は、行事の時、拝んでいたのですね。田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術振興会、1959 年）を見ると写真が載っています。

マリア観音

上記の 2 体のマリア観音が入っていた箱

（滝澤） 樫山地区というのはどの辺にあるのですか？

（松川） 三重から西に上がったところです。石原というところです。信号機があるところです。道の左側に東樫山、右側が西樫山。東は佐賀藩、西は大村藩。

樫山

（滝澤） 樫山には調べるものはありますか？

（松川） 県庁の職員川口洋平さんが、樫山の『華南三彩』の壺を調査しておられます。ヨカシ様とよばれて、重要文化財クラスでだそうです。大分の大友宗麟の輸入品の中にも同じものが一つあった。

（滝澤） このカクレキリシタンの念仏というのはどこからの記事ですか？

（松川） 正木慶文さんの本だったと思います。水方をしていた家の新道さんが、語られている。私もこの周辺を調査しているのですが、なかなか見つからないのですよね。

（滝澤） 『華南三彩』の壺はキリシタン関係のものなのでしょうか？

（松川） 分かりません。こういったものが、樫山からひょっと出てきたりするんです。本馬貞夫先生は、「ザビエルが福者になった時のメダイが樫山にあるのでは」とおっしゃっています。樫山は、三番崩れまでは熱心に活動しているんですよ。茂重が逮捕されて、獄死するんですよね。それから、樫山の動きは目立たなくなっています。復活の時にも動いてはいるんでしょうが。途中からなりを潜めてしまうんですよ。しかし、実際は彼らの信心具は出てくるんですよね。お寺の檀家になってうまい関係を保ちながら、役人には捕まらなかった

のでしょうね。昭和 5 年頃、田中用二郎（民俗資料館を作るときに行政的に中心になった人物です。）資料は結構集めたらしいのですが、その資料が今どこにあるのか分からない。倉庫が一つあるのでそこにあるのではないかなと思うのですが。弟さんが神父をされていたんですよ。樫山から引き受けてもらって。外海の民俗資料館にも結構あるんですよね。白磁のものも樫山のものだと思うんですけれど。二十六聖人館に行っているもので『雪のサンタ・マリア』もそうです。外海の出津ですね。

（松川） これは「サン・リアン」と書かれていますが、枯松神社の祠の扉ですね。神社が出来る前です。大正 7 年頃のものです。昭和 13 年に枯松神社は造り替えられています。建て替えるときに、松の根っこが腐って残っていた。そして松を撤去したしたのですが、その時、その周辺からこの古銭が出てきたのです。江戸時代の古銭です。潜伏キリシタンのお賽銭でしょうね。これで、江戸時代に潜伏キリシタンが、枯松神社に通っていたことは明らかになりますね。

枯松神社の祠の扉（「サン・リアン」と彫られている）

江戸時代の賽銭

（滝澤） 今、枯松神社の中に松の根っこが飾られていますが。

（松川） その時、撤去した松の根っこです。

（滝澤） こちらのロザリオの起源は、何でしょうか？。

（松川） こちらは、パリ宣教会からのものです。

（松川） 枯松神社への参道にある「祈りの岩」についての説明をしましょう。禁教時代はオラショは声を出して称えることはできなかった。捕まったらいけませんので。口の中でぶつぶつ言っているだけなんですね。2代、3代続けてきた中で、どこかで練習しなければならない。その練習をした場所ですね。祈りは継承していかなければなりませんから。樫山なんかでは墓で練習したそうです。松本地区では、この祈りの岩の下で練習していたんですね。練習するのは、2月から4月の寒い時期なんですね。ですので、寒さをしのぐというのもあったのではないでしょうか？四旬節（『悲しみの節』）の時期です。カクレの時代もここに来ているのですよね。大正6年生まれの人は、ここで練習したと言っておられました。昭和の一桁ぐらいまでのカクレの人たちは、ここで練習していた。私は昭和15年生まれですけど、戦後はこの習慣はなくなっていったそうですね。同級生は子供のころ、親に連れられてきたことがあるといっていましたね。親は「おらっしょ合わせ」をしていたと言います。オラショは口伝ですから、個人によって差がでてしまいます。そこで、この岩の下で合わせたのでしょう。私は母親の実家で農作業なんかがあった時、その帰り道、オラショを覚えさせられました。禁教期が終わってからここに集まって練習したのではないでしょうから、禁教期から続いていたのでしょうね。

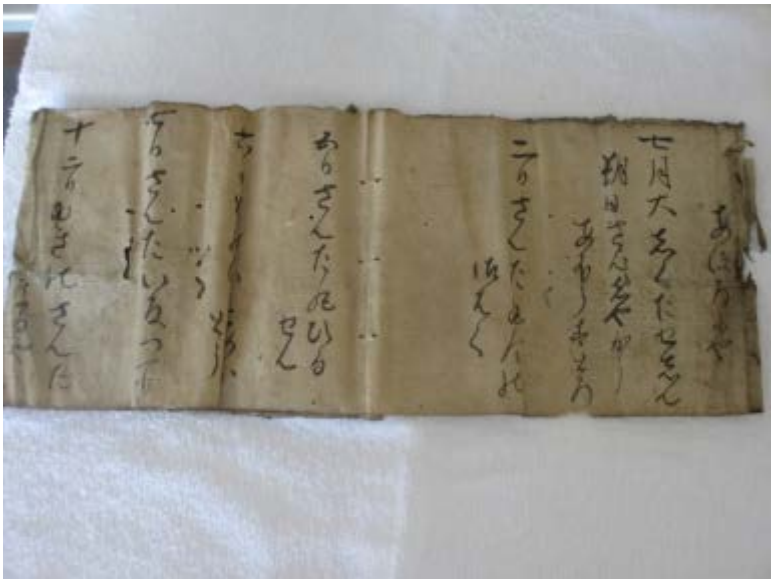
（松川） それでは、潜伏キリシタンが残した「書物」について説明しましょう。

まずは、「痛悔の祈り」です。自分の行った罪を痛悔するための祈りですね。1603年に書かれていますから、告解を聞く神父がいなくなるかもしれないと、教会の方も準備していたのではないでしょうか？神父がいなくなってきますと、告解は自分たちには一番困りますので、この痛悔の祈りを唱えていたのでしょう。この祈りは手書きですが、書き出しの部分に

従うと、印刷物があったと考えられます。本物は残っていなくて、口伝として語り継がれて、その後、字の書ける人が書き残した。これがこの「痛悔の祈り」、つまり、コンチリサンのリヤクです。

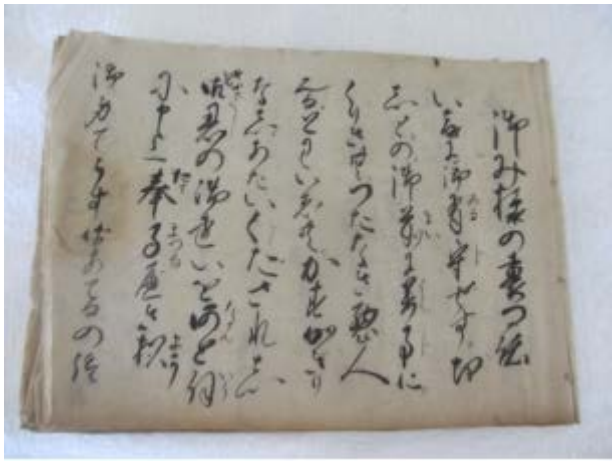
『コンチリサンのリヤク』（痛悔の祈り）

こちらは「バスチャンの暦」垣内の最後の帳方が使っていたものですよね。彼の遺品を整理する中で出てきて、ここに持ってきました。復活祭が基準になって、四旬節、そして誕生祭と繰っていくわけです。毎年、4 月に新しい暦が出ます。潜伏キリシタンは、この暦をもとに生活していたんだろうと思います。今、出津の帳方である木村さんが暦の現物を持っていますが、週ごとに暦を繰っていきます。そして組織の中に、「今週は、何曜と何曜が静かにお祈りをする日だ。作業をしてはいけない日。「悪い日」といっていますが、これを組織内に伝達していたんですよね。今は、暦を繰る日に何人来てくれるかは分からないと言っていますね。黒崎の帳方、村上さんのグループ（カクレキリシタン）方は、一年分を印刷物として出しています。聖人の日とか。カクレキリシタンの方は、これに従って行事をするんです。今でも、彼らは 20 日は肥料が扱えない日と言っています。除草剤を扱うならいいが、肥料を扱うなら参加できないと言います。



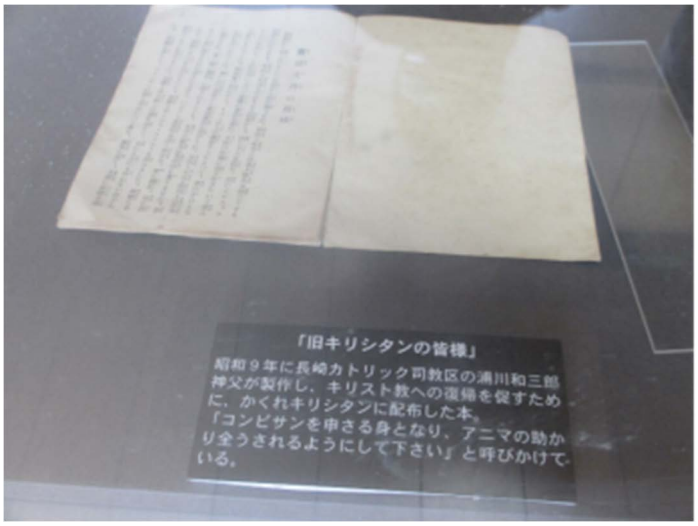
『バスチャン暦』

こちらは「オラショ」で一般の家庭に保存されていたものです。この資料館から一つ上の段の人が所蔵していたものです。今は、これをそのままに唱えているのかわかりませんが、村上さんたちは「オラショ」を唱えていますね。初穂を上げる朝に「オラショ」をしていると思いますが。



オラショ

これは浦川和三郎神父が「カクレキリシタン」に教会に戻るように勧めた文章なんです。昭和 9 年 2 月 10 日発行の冊子ですね。「キリシタン」の仲間だから、教会に復帰したらと勧めた。



浦川和三郎神父が作成した冊子

こちらは『天地始まりのこと』ですね。これも昔から口伝で伝えられたものが、執筆されました。基本的には聖書からのものですが、地元の話なんかが挿入されてですね、変わってきていたりするんですけど。『天地始まりのこと』『コンチリサンのリヤク』『バスチャンの暦』は、外海の潜伏キリシタンの一番基本的な書物ですね。これを語り継いで、250 年間信仰の灯を守り続けていたのです。田北先生が調査した時に「90 何歳かの人が全部暗記していた」と伝えています。

『天地始まりのこと』

こちらも物は「うちの母が葬式するときに、死装束をどう作るかということをメモしておった。装束の寸法を測って、メモしたんですね。葬式があった時には、これを見て、装束を作って、着せたんですね。」

経けしは、外海、この松本地区では聞かないですね。樫山にはありますけれど。

「ごうじゃく石」

オラショで「アーメンで終わるのはイエズス会」「アーメンデウスで終わるのは托鉢修道会」と読んだことがあるのですが、それは本当でしょうか？

（滝澤）バスチャンの屋敷は、本当に存在したのでしょうか？

（松川）伝承です。地元の人たちは、「屋敷跡はしっかり残っていた」といっています。建物そのものは、後世の人たちが勝手に作ったものです。バスチャンは、逃げ回っていましたから、こんな石積みのしっかりした家は建てれてたはずがありません。

（滝澤）バスチャンの伝説は、この辺りの潜伏キリシタンにとって大きなものだったのでしょうかね。

（松川）バスチャンの椿は、樫山なんですよ。バスチャンの椿を作っているのは、下黒崎ではないですね。松本でもあまり椿の話は聞かないですね。松本は、枯松神社があり、隠れキリシタンの中心地です。出津に行ったらバスチャンの椿というのは、しっかり出てきます。椿は、浦上三番崩れの話ですから。出津と樫山は、佐賀領でしたので、行ったり来たりがありましたね。オラショなんかは、明治と大正には、樫山と黒崎ではやりとりがあって、書き写していました。

おわりに

以上、研究結果報告を行った。公益財団 JFE２１世紀財団から授与していただいた研究助成金により、長崎県外海町の「潜伏キリシタン」の信仰用具と彼らの信仰の実態を詳細に調査することが可能となり、今まで知られていなかった外海町の潜伏キリシタンの信仰の実態に理解が深まった。

私が行った研究の多くが、既存の研究ではなされてこなかったことである。外海民俗資料館に保管される潜伏キリシタンの全信仰用具に関しては、未だカタログ化されておらず、私の作成した目録が初めての試みとなった。また同資料館に保管される信仰用具の一部とされる潜伏及び隠れキリシタンの信仰書籍もすべて解読し、書き下し文と現代語訳を付けた。これらの研究成果は、今後、出版していく予定である。そうすることにより、私は既存の潜伏キリシタン研究に貢献できると考える。

外海の潜伏及び隠れキリシタンに関しては、スペイン語による著作を出版し、その英語版も作成した。国際学会や私が通年で主催している「日本キリシタン講座」で２年間に渡り、外海町の潜伏キリシタンの信仰生活に関する講義を行い、研究者や一般市民の方々に自ら研究成果を還元することができた。末筆ながら、このような機会を私に与えてくださった公益財団 JFE２１世紀財団には心より感謝を申し上げたい。